

せん。あるおじさんは「俺は学校での、半分は廊下で立ってた」とかですね、「学校には三日ぐらいしか行つてない」とかですね、とにかく学校でもう怒られて、叱られたり、勉強ができなくて、嫌な想いでみんなからいじめられたとかですね。あんまりいい思い出はないんです。

ところが、みんなは「学校」という名前をつけようというんです。ほんものの勉強をここでできるんじゃないか。今ちよつとやつてゐることは、何だか知らないけど、俺たちが必要としていることを、とにかくわかってくるような気がする。本当の「学校」でいいんじゃないか。ということになったんです。その時々先生というのは、一番そのなかで知っている人が立ち上つてしゃべつてくれる、黒板に書いてくれるということが始まったわけですけど、はじめは思ひきつて寿自由大学がいいとか、大学ちゅうのは、ちよつと程度が低いんじゃないかとか、いろんな想いがあるもんですから、小学校にしようとか、小学校じやちよつと恥かしいとか、いろんな話が出まして、夜みんな集まるもんですから、『夜間学校』という名前にしようということで『寿夜間学校』という名前になるんです。

文字に書く

その当時、まずみんなバーツとしゃべりまくつていったあと、しゃべつたものはどんどん消えていつちやうもんですから、何かこう、あんまり書いたことはないけど、字でもつて書いてみようというふうなことで、出てくるとこれが不思議と俳句とか短歌なんです。あるいは、せいぜい詩ですね。そういうものが次々に出てきました。それで、とつてももつたないもんですから、寿文学というガリ版刷りの雑誌をどんどん出しまして、そこに集まってきた作品をどんどん載せたんです。

そうすると、とつてもいいものが次々と出てくるんです。いくつかだけ、ちよつと紹介をします。たとえば俳句はいごというのに、

軍手はめれば 働く力が たちあがる

この詩を持って来てくれた桜井さんはもう亡くなりました。しかし、この詩をもつて来

てくれたときには「どうでえ」と、大声でみんなの前でよんでくれましたね。
それから、こういうのが出てくるんですね。

寿に 交番ありて 役立たず

これが出たときなんか、みんな拍手です。それもほんとに、広告の裏やなんかにたどたどしいので一生懸命、とにかく書いてくれるんですね。

寒きドヤ 天つき体操 いくたびぞ

暖房も何もなく、自分で朝起きて、寒くてしよがねえというので、天つき体操「ヨ
オイシヨオ、ヨオイシヨオ」というのをやってたつていうおじさんですね。一生懸命書いてくれます。
それから、

指一本 落として握る 暮し金がね

わざと仕事のとくに事故を起こして指を落とすんです。それで、労働保障で、お金で何とか生きていこうという、自分の身を削って、お金にありつこうとした人の詩ですね。

こういうものが次々に出てきました。これをもったいないので、町の中に貼り出そうと
いうことで、大きな模造紙にこういうふうな作品を次から次へと書いて、町の中に貼りま
した。立ち止まってじーっと見ていく人、これから詩みたいなのがどんどん出てくるん
ですが、それを見て涙ぐんでいる人、それからそれを一生懸命写していく人。そういうもの
が次々に出てきました。おもしろいものもたくさんあって、

この町で 死することもあるだろう

今日も がまんの 道を行く

なんていうのが出ると、勝手にこれには節がつかまして、みんなが歌ったりというふう

なことになるんです。

こういうふうなものが次から次へと出てきまして、とつてもそういう意味ではにぎやかな学校になってきたわけなんですけども、今まで、そういう意味では、酒場でもって、自由に話をしたりなんかしてたんですけど、自分のなかを一回くぐって、自分を表現するといふことが、なかなかできなかつたわけですね。だから、文章を書くということが実にいろんなもの、そのなかから引き出すということができるといふことがわかつたんですね。これはもう、なかでほんのいくつかなんですけども、たとえば「無い無いづくし」という詩を書いてくれたおじさんですね、

物価高くて やりきれない

景気悪くて しかたがない

失業者多くて しょうがない

あてにした職安 たよりにならない

働く場所は さらに無い

というふうな、本当にそのなかにいなければわからない歌が出てくるんです。

寿かぞえ歌

ひとつとせ 人に言えない わけあって、

ぶらりと来たんだ 寿町

ふたつとせ ふたりのかわいい 子を残し

きつと帰るぜ ふるさとへ

みつつとせ 身なりなりふり かまわずに

仕事一本 やりぬくぜ

もうこういうものが、どんどん出てきまして、年の暮れには金が無いんですけど、みんな

なで集まって忘年会やろうというのと、そういうさまざまの、自分で思ってる自己表現ですね、今まで忘れていた、聞いてくれる仲間がいなかった、そういうものが次々と出てきたんです。

中村さんとの出会い



そのなかで、こういう学校のなかで、とっても中心的にやってくれた尾野さんというおじさんがいたんですが、この方が亡くなりました。その方はいろんな人たちを、仲間に入ってくれたんですが、そのなかで、今日、今、少しお話しようと思うんですが、中村さんというおじさんを、夜間学校に引っぱってきてくれるわけなんですけど、この中村さんが

はじめて、寿夜間学校のなかで、自分の生いたちを語ってくれるんですがね、最初、この中村さんと出会ったときは、寿の町の人、のちに私は児童相談所に来て、もっとはつきりするんですけど、自分をこう出したいくない想いがありますので、中村さんも帽子を深々とかぶっているんです。もう、目が見えないくらいに深く帽子をね。前に、野球帽です。そして、冬でもないのに厚いジャンパーをはおって、町の中を歩いていました。でも、その頃、もうほとんど、町の人たちは顔見知りになっていましたから、中村さんと「オッ」というので、道であいさつをかわす。するとむこうも「オス」という形であいさつをかわす。もう六四か五だったですね。その当時。ときどき、仕事がないときは、リヤカーにダンボールやビールびんを積んで歩いてました。この彼が不況のさなかに、リヤカーを引いて歩いてるときに倒れましたね、心臓発作だったんですが倒れて、顔が真っ黒になるくらいに、こうふるえましてね。そして、病院に行かなければならなくなって、病院に入れたんですね。そして、通院というところで良かったんですけど、それからもうしょつ中生活館の入口のところまで机を置いて相談をしている僕らのところへ来て、いろんなおしゃべりをして帰るようになりました。

この中村さんのいるドヤを訪ねたいなあというふうに思ってたので、ある日、ドヤに行きました。小さな三畳間で、コンコンとたたいて、鍵なんか閉めてありませんから、スツと開けて「こんばんわ」と言つて、夜ですわね、夕方訪ねてきました。

そして、そのとき、中村さんずーっと帽子かぶってたんですが、ひとりであるもんですから、帽子が壁にかけてあつたんです。僕はそのときはじめて、真顔の中村さんに会いました。目がパツと会つて、それから中村さんパツと立ち上つて、あわてて帽子をパツとかぶったんです。「やあ、中村さん、今日もう顔見ちゃつたし、いいよ、もう俺とだし、いいじゃねえか」「おう、そうか」というので、元のとこへ掛けて、それからいろんな話をしました。

そのとき中村さんは、もう関を切つたように、ワーツと、その戦争中の話をしたんです。僕は何度も、途中で声が出てくるのを押えられなくて泣きました。内地にいたわけですけど、戦友が次々と、敵機の襲来で、鹿児島にそのときいたんだそうですけど、海岸で次々に撃たれて死んでいく。その人たちの遺体処理をしたときの話を、実に微にいり細にいり覚えてるんです。

今ではもう中村さんは実にペラペラとしゃべりますし、のちに話しますが、識字学校の中心メンバーなんです、そのときまで、驚くなかれ、寿町には三四年いるわけですが後半の約二〇何年間というのは、ほとんど人と話をしてないんです。自分が大事にして、一緒に暮らしていた女の人がいいたんですが、その人が別の、本当に気を許した女の人だったんですが、その方が、自分のトラの子のお金を全部持つてね、別の男の人とかけ落ちして行ってしまつたんです。それから、本当に人はもう、信頼することができんということでももしゃべらない。仕事以外の話はほとんどしないで黙々と港湾の仕事をしてきた。もう本当に歯が二本しかありませんけれど、そして六十すぎまでとにかく元気でいられたという事は、相当仕事もできたし、からだも丈夫だったんです。

そんな中村さんですから、ほとんどしゃべらない、じーっとその胸の中に貯めていたものだったと思います。それがもう数時間にわたつて、ずーっと、それがその死んだ人の遺体処理を任せられたんです。今ちよつと前まで生きていた人間が撃たれて、ザクロミたいにおなか破れて、頭が破れて、それをまあ木を積んで、その上に遺体を乗せて、石油をまいで、火をつけて、その死んでいくときにですね。そのときは僕の手を取つてね、

「みんな死ぬときは『天皇陛下、万歳』というって言うてるだろう。俺はひとりも聞かなかったなあ。そんなこと言った人。ひとりもいねえぜ。みんな何だったと思う？俺は今でも耳にはりついてるよ。『おつかさあーん』『おつかさあーん』って、みんな言ってるんでいいんだぜ。」というんですね。

その「おつかさあーん」といつていた戦友ですね。仲間の人の遺体、内臓が燃えないんだそうです。内臓がいくら石油をかけても燃えないで、騒ぎ回しながら「なんで、俺はこんなことしなくちゃなんねえんだ」そして、亡くなった人が名譽の戦死でもって、桐の箱に入って帰っていったと。「俺は、絶対、あのことは忘れん！俺は生き残ったから、いつかは言いてえと思ってるんだ」その話を、ずーっとしてくれたんです。

もうずっと貯めてたものが一挙に出てきましたからね。実にひとりひとりの人の名前まで全部覚えてるんです。生年月日まで言うてくれました。

僕はもう、とつてもがまがでできなくて「この話をね、夜間学校で話してくんないか」といったんです。「いやあ、人の前でなんか、話はしたくねえな。いやあ、大体俺のことなんか信じてくれねえよ」「いやとにかく、夜間学校へ一度来てくれよ。尾野さんも言っ

てたじゃないか」ということで、夜間学校に来てもらって、何回か聞いてもらったんです。一緒に加わってね。そして、その中村さんにこの話をしてもらおうと思っただけです。

中村さんの生いたち

それで、やる日になりましたね。時間になってもなかなか来ないんですよ。あれえ、どうしちゃったんだろうなあ、と思っ、ヤキモキしてましたら、窓から下をのぞきましたらね、そこにワンカップ売ってるところがあるんですけども、その自動販売機のところで一生涯命飲んでるんです。三杯か四杯ぐらい飲んで、それから上ってきて、実にたどたどしく話しはじめてくれました。相当決意がいったと思うんです。途中まではね、本当にどうなっちゃうのかなと、僕は思っただけです。彼が話し出すのにな。あの、言わなくていいような自分の恥づかしいことを、ポツポツと言い出すんですよ。「俺はダメな人間で、小っちゃいときこんなことをやってきて、悪い人間で、すみません」という話から始まるんです。そして、途中から、その戦争の話になるんです。あのときとほとんど変わらない調子になりました。もう止まらないんです。そばで僕が水もっていったげても、もう「い

らねえ、いらねえ」と夢中になってしゃべりました。もう、聞いている労働者の仲間たちが手ぬぐいはずして、同じ体験してた人もいたと思いますね。終わったときにはそこにいた人は本当に三十人程度の労働者の仲間だったですけど、割れるような拍手。

中村さんは「ああ、俺は話して良かったなあ。こんな話す。タコ部屋行ったときの話こんな次するぞ」もう聞いてくれるとは思わなかった労働者の人たちに、受け入れられたということですね、その次にはタコ部屋の話です。

タコ部屋

戦争から帰って来て、家族が全滅したというふうに彼は思っていましたね、そして上野に行つて、地下道にいてるときに、銀シャリが食えるということで、北海道の旭川の鉄道敷設の工事に行きました。たくさんの人が連れられて行きましてね。ところが、恐しいところだね。最初だけ、たしかに銀シャリが食えた。しかし、その次からはそれどころではなくて、ものすごい苛酷な仕事が始まって脱走しようとする人が何人も出た。だけど、脱走しようとしたら、必ずつかまって、つかまって何をされたかという、まっ裸にされ

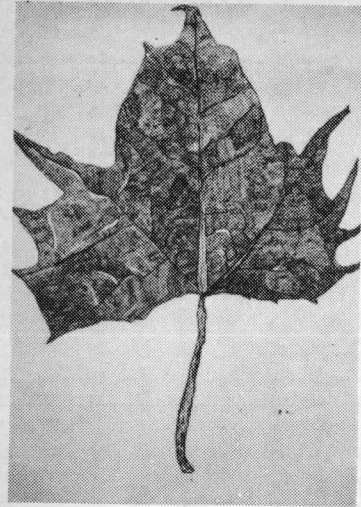
て、北海道ですからダルマ・ストープですね、その上に座らされて、まっ赤になったストープの上に座らされて、そしてもう、ジリジリと焼けるようなにおいですね。見てる人間が吐いちゃった。そんなすぎまじいリンチを受けて、そしてそのあと、表に放り出されて雪の中に放り出されて、そして、お酒をいっぱいかけられて、そうすると、蚊がたくさん来るんだそうです。長くて三日間うめきながら、蚊に全身刺されながら死んでいった仲間をたくさん見た。

タコ部屋の歴史つてのは、いろんな本や何かで僕ら聞いてましたけど、もうそのときの話は本当に水をうったようにシーンとなりました。中村さんはどうしても脱走しようと思つた。そこにいたら、自分も死んじゃう。線路を掘つてると、地下足袋の足がピョット出てくるんです。そのまま野に棄てられて土をかぶせられただけの遺体の足が、ピョット出てくる。そういうふうな状況だったそうです。

それで、脱走しようと思つた。真剣に考えて、これは彼の哲学ですね。絶対、これはだれにも相談しないでいこう。みんな怖いですから、必ず、二人や三人に打ち合わせて逃げられます。そうすると、必ずどっかから漏れちゃうというんですね。それでひとりで逃げ

ることにしました。

それから、明け方の四時から五時というのが一番手うすになる時間、この時間、どっかに隠れていなければいけない。さんざん考えてどこに隠れたかというところ、便所の中です。翌日の夜から、一番はずれにあるトイレの中に首までつかって、朝の四時がくるまでじっと待っていた。一番端のところの木でできた扱み取り口で、そこだけは自分で壊せると



いう自信があった。ズーッと明け方まで待ってて、それを全身の力で壊して、もうクソだらけになって逃げたわけですね。それでも見つかって、途中で鉄砲の玉がピュンピュン飛んでくるのを、自分で感じたといいます。

夢中で逃げていった。鉄砲の玉が飛んでこないところまで、とにかく逃げおさせた。「大丈夫かな」と思ったら、北海

道には熊がいるんですね。大きな熊がのっそり出てきて、たしかに逃げおせた人たちも熊に食われたという話は聞いたと、聞いたことがあったけど、そのとき彼は多少余裕があったんでしょうね。話すときに「学校の先生、熊からどう逃げたらいいか、教えてくれんねえもんなあ。俺はどうしていいかわかんなかった。夢中で逃げた。熊は速いんだなあ。四つ足だもんなあ。すぐ追っつかれちゃう。しようがないで木に登った。絶対、熊が木に登るなんて教えてもらってなかった。学校で。熊グングン登ってくる。爪でガチッと押さえて、非常に速い。てっぺんまで来て、しなっっちゃった。」これは事実なんですけれど、そのとき聞いてるときはみんな僕らもかたずをのんで、たしかに中村さん生きてここにいらるか、助かったんだと思うけど、手がみんなピッシヨリになるような迫力だったですね。

そして、彼は跳び降りたんです。たしか昔どっかで聞いたことがある。死んだふりをすれば助かるということをどっかで聞いた。それで跳び降りて、死んだふりをして、ズーッと雪の中にいたわけですね。そうすると熊が降りてきて、においもすごいですから、端から興味深そうに足の方からペロペロなめて、頭のてっぺんまでなめたそうです。息を殺して、はじめて心のなかで『南弥阿弥蛇仏、南弥阿弥蛇仏、南無妙法蓮華経、イエス・キリ

スト』と、あらゆるものをこう言った。それで熊は、本当に死んだと思ったのか、あまりにもこれは汚きたないと思つたのかわかりませんが、とにかく速くの方へ行つた。ちよつとも自分が動いて、また戻ってくるといけないというので、遠くまで、見えなくなるまでじーつとしていて、姿が見えなくなつて起き上がろうと思つたら、全身凍傷とうじやうだったそうです。手も足も、ほとんどいうことをきかない。這はいずるみたいに、この辺にくると実演するんです。パツと横になつて、こうだぞ。這はいずるみたいに行つて旭川の警察まで逃げるんですね。

警察ではすぐ連絡が入りますから「あつ、よくここまで来たな。おまえぐらいだ、ここまで来たの。じゃまあ、とにかくゆっくり風呂でも入つて、飯でも出してやるから、替えて休んでろよ。」連絡が入りますから、休んでたらずぐつかまつて、あのストープですね。ダルマストープ。だから、もうそこにあつた風呂に入るふりをして、ありあわせのものをパツと食べて、そして着替えもつてまたそこから逃げてですね。そしてとにかく大変な思いをして、彼は逃げてきたんです。

現在、タコ部屋の記録というのは、北海道のオホーツクス民衆史講座の人たちが発掘を

していますけれど、実際に逃げお世話した人というのは本当に数が少ないそうです。そういう意味からいうと、本当に貴重な体験だったわけです。

そのことを僕らは、その夜間学校で聞いたわけです。のちにこれは『私の自叙伝』という講座になりました。

中村さんの話が終つたあと、『私の自叙伝』の講義というのは、次から次へと立候補者が出ました。『俺の過去も聞いてくれ。俺も似たようなのがあから、こん次は俺がやる』ずーつとしばらくの間『私の自叙伝』というのは、夜間学校のとつても人気のある講座になりました。聞いてくれる仲間がいるということですね。

いつになったら、字教えてくれるんだよ！

ところが、この中村さんに即すぐしていいますと、これだけの話をしてくれた中村さん。これだけの人生をくぐつてきた中村さんが、字が書けなかつた。字が読めなくはないんです。勘かんで読めるんですけども読めなかつたんですね。これを僕らは知らなかつたんです。もうそんなことありえないと思つて、夜間学校で当然黒板にいろんなことを書く。読めるふ